



読書会レジュメ

——『虚構世界の存在論』を読む——

保井海佑
2019年2月23日

● ● ●

序——虚構的対象の存在の謎

論理学者にとって虚構名はつねに悩みの種であった。「ペガサスは有翼の馬である」という文は真であると思われる。だが、この文を真であると認めてしまうと、困難が生ずる。「ペガサスは有翼の馬である」ということから、「有翼の馬であるものが存在する」という偽なる文が論理的に導けてしまうからである。

ペガサスは有翼の馬である。 Fa

∴有翼の馬であるものが存在する。 $\exists xFx$

ここで用いられているのは、存在汎化と呼ばれる推論規則にほかならない。存在汎化とは、単称命題（固有名を主語とする文）から特称命題（存在性を主張する文）を導いてよいという論理法則である。「吾輩は猫である。ゆえに猫であるものが存在する」など、存在汎化の適用例を見れば、存在汎化の正しさは明らかであるように思われる。

以上をまとめるとこうだ。

(1) 「ペガサスは有翼の馬である」という文は正しい。

(2) 存在汎化も正しい。

(3) それにもかかわらず、「ペガサスは有翼の馬である」に存在汎化を適用すると、「有翼の馬であるものが存在する」という間違った結論が得られてしまう。

これが解くべきパラドックスである。

*——存在汎化でなく述定原理に訴えてパラドックスを定式化することもできる。述定原理とは、『 a は F である』が真であるならば、 a は存在する」という原理である（推論規則ではない）。述定原理によれば、「ペガサスは有翼の馬である」ということから、「ペガサスが存在する」ということが言えてしまう。かくして述定原理によっても同様のパラドックスが生ずる。

虚構名を含む文はさまざまなものが考えられる。虚構理論の成否に関係すると思われるものを以下に列挙しておこう。

(1) ホームズは棚から褐色の分厚い本を取り出した。[小説内の文]

(2) ホームズは生涯結婚しなかった。[読者や批評家の文]

(3) ホームズは存在しない。[哲学者による文]

(4) ホームズは工藤新一よりも賢い。[貫虚構用法]

- (5) ホームズはドイルによって創造されたキャラクターである。[虚構性に言及する文]
- (6) 「私は虚構のキャラクターにすぎない」とホームズは言った。ホームズは、自分がドイルによって創造された単なる架空の人物にすぎぬことを知っていた。[メタフィクションにおける文、つまり虚構内で虚構性に言及する文]
- (7) 「私は虚構のキャラクターにすぎない」というホームズの言明は正しい。[虚構内で虚構性に言及する文に対する批評家の文]

1. 記述理論（ラッセル）

ラッセルによれば、単称名辞（確定記述や固有名）は論理的単位ではない。「フランス国王は禿である」の論理構造は、 Ba ではなく、 $\exists x(Fx \wedge Kx \wedge \forall y((Fy \wedge Ky) \rightarrow x = y) \wedge Bx)$ であるとされる（「フランスの国王であってしかも禿であるような者が存在し、しかもフランスの国王なるものは存在するとすればただ一人存在する」）。

この分析を適用すれば、「ペガサスは有翼の馬である」は偽となるから、パラドックスを回避することができる。

クワインによれば、「ペガサス」に対応する記述がすぐには見つからない場合、「ペガサス（pegasizes）」といった人工的な述語を作ってしまうばよい。

*——確定記述とは、the kingのように定冠詞がついた名詞句のこと。

*——もともとラッセルは素朴な実在論の意味論を信奉していた。これは、どんな語も指示対象を持ち、それによってこそ語は意味を持つとする考えである（何でもかんでも存在することを認める点で、マイノンクにも近い考え）。しかしこの考えでは、「a man」のように文脈によって異なる指示対象を持ちうる語をどう解釈するか、「現在のフランス国王」のような指示対象を持たないと考えられる名詞句をどう理解するかといった問題が生ずる。この問題を解決すべくラッセルは、「a man」は概念〈a man〉を指示し、そして概念〈a man〉は何らかの一人の男（たとえばジョーンズ）を表示するのだ、という「表示の理論」を一度は構築する。だがこれは意味の機構の説明としては複雑で、すっきりしない。そこでラッセルは、素朴な実在論の意味論をあくまで擁護する方向ですっきりした意味論を手に入れるべく、記述理論を考案することになった。記述理論の眼目は、問題の解決を意味論のレベルで行なうのではなく、構文論のレベルで行なうというものである。

*——ラッセルとしては、ある個人が「ペガサス」という語を適当に使うことができている以上、その個人は何らかの記述を「ペガサス」に付与しているはずであり、それが「ペガサス」の意味にほかならない。したがって、クワインと違ってラッセルにとっては、「ペガサス」という語を一意的に特定する客観的記述を見つける必要はない。「ペガサス」の意味は、人によっては「有翼の馬である」だったり、また別の人によっては「虚構論の文脈でよく引き合いに出されるギリシア神話上の生物である」だったりする、ということであり。

三浦によれば、ここで注意すべきことが三つある。

①記述理論では、実体、個物、特殊者としてのハムレットは存在しないことになる。しかし普遍者としてハムレットが存在すると認めることはできそう。よって、理論的実体説や種類説を許容する余地が記述理論にはある。

②曖昧な文S「虚構のなかでハムレットは男性である」は二通りに読める。

- ・SA「ハムレットは、〈虚構において男性である〉という性質を持つ」
- ・SB「虚構において、〈ハムレットは男性である〉ということが成り立つ」

前者は de re 命題、後者は de dicto 命題の区別に相当する。三浦によれば、ラッセルは SB を真だと認めるはずであり、記述理論において何らかの形で虚構的対象が存在すると言える余地がある（どのような形でかは諸説が分岐する）。ラッセルの非公式的見解は代入的量化説に近い。しかし論理的に考えれば、記述理論は de dicto 説を許容する余地がある。

③「これ」「あれ」「ここ」のような指示詞のみが本当の固有名だという、ラッセルの「論理的固有

名」の議論は、物理主義の考えに通ずるものがある。

*—— $(\Box F)a$ のように、個体 a に対して $\Box F$ という様相がかかっている場合が de re 様相（事物様相）。 $\Box(Fa)$ のように、文全体に様相がかかっている場合が de dicto 様相（言表様相）。量化表現と併せて考えると理解しやすい。 $\exists x(\Box Fx)$ だと de re 様相、 $\Box(\exists x Fx)$ だと de dicto 様相。

2. 擬装主張説（サール）

意味とは「表現を指示に用いるための規則・習慣・規約の集合である」。言語表現のタイプ（指示句や文そのもの）が意味を担い、言語表現の具体的使用が指示を担う。こう考えるストローソンにとって、「フランス国王は禿である」は有意味ではあるが、真でも偽でもない。この文の使用において、フランス国王の存在はただ語用論的に前提されているだけであり、意味論的に含意してはいないのである。

小説内の文は、指示のふりをしているにすぎない。ストローソンと同様、サールにおいても、作品中の文は主張ではなくそのふりであるゆえに、真でも偽でもないことになる。

しかしサールによれば、指示のふりによっていったんキャラクターが創造されれば、キャラクターは本当に現実世界に存在するようになり、われわれはキャラクターを指示できるようになる。よって批評家による文は真たりうる。

だが、この場合キャラクターはいかなる存在者なのか、肝心なところは不明なままだ。

*——「指示のふりによってキャラクターが創造される」のはどういう仕組みによってなのか。個人的にはこの点も気になる。

3. 還元主義（ライル）

還元主義は言語説の一種である。まず、虚構言説は次のように分類されうであろう。

- (1) ディッケンズが『ピックウィック・ペーパーズ』に書く命題。
- (2) 「ピックウィック氏はロチェスターを訪れた」のような読者による命題。
- (3) 「ピックウィック氏は想像上の対象である」のような哲学者による命題。

ライルによれば、(1)は真でも偽でもない（サールと同じ）。

(2)は『『ピックウィック・ペーパーズ』には〈ピックウィック氏はロチェスターを訪れた〉もしくはそれを含意する命題が書かれている』のように読まれるか、もしくは『『ピックウィック・ペーパーズ』に書かれていることが真であれば、ピックウィックという名で、これこれのクラブを主催して、……、ロチェスターを訪れたような人物がいることになるだろう』のように読まれることになる。

(3)は『『ピックウィック氏はニセ指示句である』とパラフレーズされる。

*——(2)の二番目のパラフレーズは、『『ピックウィック・ペーパーズ』に書かれていることが真であれば、ピックウィック氏はロチェスターを訪れた』では駄目なのだろうか。もっともこれでは虚構言説と反事実的条件文を同一視することになり、やや不自然かもしれない。

ヴァン・インワーゲンによれば、どんな場合にも上のようなパラフレーズができるかは大いに疑問である。

- ・19世紀の小説中のキャラクターには、18世紀のいかなる小説中のキャラクターよりも詳しい身体描写がなされているものがある。 $\exists x(C_{19}x \wedge \forall y(C_{18}y \rightarrow Bxy))$
- ・18世紀のいかなる小説中の女性キャラクターであれ、より詳しい身体描写がなされている19世

紀のキャラクターがいるものである。 $\forall x((C_{18}x \wedge Wx) \rightarrow \exists y(C_{19}y \wedge Byx))$
 ふつうに考えれば、前者から後者が論理的に導出できるはずである。しかしライル流のパラフレーズを施してしまうと、前者から後者が導けないことになってしまい、不合理である。

*——ヴァン・インワーゲンの挙げる例は貫虚構用法であり、また「キャラクター」という語を含んでいる。ヴァン・インワーゲンはその論理的関係を問題視するが、しかしそもそも還元主義のやりかたで貫虚構用法や「キャラクター」という語を含む虚構言説はどうやって扱うるのであろうか。

4. マイノング主義（パーソンズ）

マイノング主義者は、「存在する」と「ある」を区別する。マイノング主義とは、どんな指示句に対しても必ず対象があるという考えである。「ペガサス」「丸い四角」「黄金の山」のような非存在者も、存在はしないが[・]_・あることになる。

しかしラッセルはマイノング主義にこう反論する。「存在する黄金の山」という指示句を考えよ。黄金の山は現に存在しない、よって存在する黄金の山というものはない。しかしその意味からして「存在する黄金の山」は存在していなければならない。これは矛盾律に反するから不合理である。

*——つまりマイノング主義は、存在汎化あるいは述定原理を認めないというやりかたでパラドックスを解消しようとする。

*——「存在する黄金の山」を記述理論ではどうパラフレーズするのであろうか。

このラッセルの反論に対してパーソンズが取る戦略は、核述語と核外述語との区別を明確化するというものである。

核述語 「青い」「背が高い」「ソクラテスを蹴る」「ソクラテスに蹴られる」「誰かを蹴る」「黄金である」

核外述語 存在論的：「存在する」「神話的である」「虚構的である」、様相的：「可能である」「不可能である」、志向的：「マイノングによって考えられる」「誰かによって崇拜される」、技術的：「完全である」

どんな核性質も以下の条件を満たさない。つまり、性質 F が S と S' のどちらかを満たすならば、 F は核外性質である。

$S \quad \exists X(X \text{ は核性質の集合} \wedge F \notin X \wedge \forall x(x \text{ は } X \text{ のすべての要素を持つ} \rightarrow x \text{ は } F \text{ を持つ}))$

$S' \quad \exists X(X \text{ は核性質の集合} \wedge F \notin X \wedge \forall x(x \text{ は } X \text{ のすべての要素を持つ} \rightarrow x \text{ は } F \text{ を持たない}))$

対象とは、核性質の集合と一対一に対応するもののことである（パーソンズによる定義）。 $\{P, Q\} \neq \{P, Q, P \wedge Q\}$ であるから、 $\{P, Q\}$ と $\{P, Q, P \wedge Q\}$ はそれぞれ別の対象を表すことになる。実在する対象はどれも論理的に閉じているが、一般にはそうではないのだ。

*——論理学の枠組みで考えれば、核述語とは F や G などのふつうの述語のことであり、核外述語とは \exists や \forall などの演算子のことだと言えるかもしれない。ここで、 \exists は二階述語とも言われることに注意されたい。ときどき誤解する人がいるが、 $\exists x Fx$ は「ある x が存在する。そしてその x は F である」と読み下すべきでない。せめて「ある x が存在し、 x は F である」と読むべきである。自然な日本語にするならば「 F であるようなものがある」となる。何が言いたいかというと、 $\exists \dots$ とは「……であるようなものがある」という述語、いわば「述語を取る述語」なのであり、この意味で「二階」の述語なのである。

*——数学において、ある集合がある性質について閉じているとは、その集合の要素に対して演算を施した結果が再び元の集合に属することを言う。自然数全体の成す集合は、加法について閉じているが減法について閉じていない。したがって、ある集合が論理的に閉じているとは、その集合から論理的に導出しうることはすべてその集合にすでに属しているという意味になる。

さて核性質と核外性質との区別により、「存在する黄金の山」は存在しないのみならず、ありもしないことが言えることになる。こうしてラッセルの反論は退けられる。

パーソンズは核外性質 P の希釈版である核性質 p なる概念を導入する。「任意の实在の対象 x に対し、 x が P を持つ $\iff x$ が p を持つ」とき、 p は P の希釈された核性質であると言う。この概念を用いれば、文字通りあらゆる対象をこの世界のメンバーとして迎え入れられる。こうして「存在する黄金の山」という指示句も、それが有意味である以上、存在しないがやはりあると言えることになる。

しばしばマイノング主義の最大の難点と見做されているのが、实在と非实在との関係をうまく扱えないという点である。これに対するパーソンズの解法は、核関係に非対称性を導入することである。存在物は非存在物と関係を持つことはできないが、非存在物は存在物と関係を持つことができると考えるのである。

しかし三浦によれば、さらに多くの難点が指摘できる。

- (1) キャラクターの創造という事実を適切に扱えるのかや疑問である。
- (2) 作品内で区別できないキャラクターを理論的に区別することができない。
- (3) 核外性質のみが付与されたキャラクターの場合、また、まったく同じ核性質を持つ二つのキャラクターが与えられた場合、どうするのか。

けっきょくマイノング主義は、「存在」と「ある」とを弁別するという存在論的にヘビーなコストを支払った割には、形式的に複雑な構成を取らざるを得ない点に難点があると言えよう。

5. 理論的実体説（ヴァン・インワーゲン）

理論的実体説とは、批評言説中に現れるキャラクターは、理論的実体として現に存在すると考える立場である。クワイン的なメタ存在論を採用するヴァン・インワーゲンにとって、真なる理論のなかで変項の値となっているものは存在すると言えるのである。文芸批評は理論だから、そこで量化されている虚構的对象は存在することになる。

真偽の問題が生ずるのは批評言説においてのみだという点に注意せよ。小説内の文については真偽を問うことが意味をなさないので、小説内の文は真でも偽でもなく、命題を表してすらいない（ここはサールと同様）。

*——「理論的对象は、主に科学哲学の中で論じられる概念である。一般的に、理論的对象とは、それ自体は（直接的に）観察できないが、観察可能な現象をうまく説明する便宜的な対象を指す。たとえば電子や他の素粒子は、それが正しいかどうかは別として、『物理学の理論的对象』と言われてきた」。倉田剛『現代存在論講義Ⅱ——物質的对象・種・虚構』新曜社、2017年、150頁。

ディケンズの『マーティン・チャズルウィット』の登場人物サラ・ギャンプは、次の性質を実際に持つ。

- ・小説のキャラクターである。
- ・ディケンズによって創造された。
- ・風刺的な小悪党である。
- ・1843年時における雇われ看護人なるものの忠実な描写である。
- ・男勝りの反女性的人格がディケンズの全小説中最も目に鮮やかに展開した形である。
- ・存在する。

逆に、サラ・ギャンプは「太っている」「ジンを好む」「友人を持つ」などの性質を持たない。むしろ理論的実体説では、サラ・ギャンプはこれらの性質を付与されている、と考える。「サラ・ギャンプは太っている」の論理形式は次のようなものとされる。

- ・A（太っていること、サラ・ギャンプ、『マーティン・チャズルウィット』）

これは「太っていることがサラ・ギャンプに対し『マーティン・チャズルウィット』において付与されている」と読む。

三浦によれば、このような考えかたには三つの長所がある。

- (1) 標準的論理法則の遵守。キャラクターを完全な対象として扱うことができ、二値原理を保持できる。弱い矛盾も処理可能（クワイン的メタ存在論を採用した以上、標準的論理法則の遵守は当然の帰結）。
- (2) 存在の種類を制限できる。
- (3) 細かな点においてマイノング主義よりも優れている。

短所は、「ピックウィック氏は存在しない」という文をパラフレーズするしかたがやや直観に反するところである。

*——論理法則を遵守することができる点を利点として挙げているが、本当か。ヴァン・インワージェンのパラフレーズ手法では、「サラ・ギャンプは太っている」と「サラ・ギャンプはジンを好む」という前提から、「サラ・ギャンプは太っており、しかもジンを好む」を論理的に導出することができないように思われるが、どうか。

6. 種類説（ウォルターストーフ）

ウォルターストーフによれば、虚構作品は、作者がある状況について鑑賞者を考えさせるためにその状況を呈示する行為によって特有の世界を投射するものである。虚構を作ることは主張のふりではなく、「呈示する」という独自の発語内行為である（サールの擬装主張説への批判）。作者が呈示するのは一般的状況だから、その内容は一般命題であり、そこに登場する虚構的対象はみな「種（kind）」である。

*——発語内行為とは、「言葉を発することそれ自体がある種の行為を行なっている事態を指している。[...] 船の進水式のさいに『わたしはこの船をクイーン・メアリーと命名する』と言うことは、命名という行為を行なっているものであり、真偽判断のできる命題を述べているわけではない」（<https://plaza.umin.ac.jp/kodama/ethics/wordbook/illocutionary.html>）。発語内行為の例としては、主張、命令、警告など。

あらゆる性質に一一対応して種が存在する。自然種だけでなく名目種も存在する。ユニコーンや丸い四角など、例が存在しない場合でも種自体は存在する。

「内に本質的（being essential within）」という関係が次のように定義される。

- 性質 P を持つことが種 K の内に本質的である \iff 「何かが K の例ならばそれは P を持つ」が必然的である。

虚構的対象は、作品世界の最大成分という種である。成分とは次のように定義される種である。

- 種 K は状況 S の成分である \iff S は必然的に、「もし S が起これば、K の例がある時点に存在する」ようなものである。

作品世界 WW のなかには数多くの成分が登場するであろうが、そのなかでもキャラクターとは最大の成分のことである。作品世界の最大成分は、正確には次のように定義される。

- K は作品世界 WW の最大成分である \iff K は WW の成分である。かつ、K の内に本質的であるすべての性質が K* の内に本質的であるが、K* のうちに本質的であるある性質が K の内に本質的でない、というような WW の他の成分 K* があるならば、WW が起こったとしたとき K* の例とは別個の K の例がなければならないであろう。

種類説の長所は、存在論的コストがきわめて安いところである。種と考えれば、「例示の原理」「完全性の原理」を遵守することができる（「例示の原理」は述定原理に似たもの、「完全性の原理」はど

んな対象 x とどんな性質 P についても、 x は P であるか P でないかのどちらかだというもの)。種は、通常の形而上学によれば存在する。ただし種は必然的に存在するので、パーソンズと同様、厳密に言えば作者はキャラクターを創造したのではなく選んだだけだということになる。

「完全性の原理」の遵守についてウォルターストーフはこう考える。「虚構的对象の不完全性」と言われてきたものは、実は非決定性の問題であったと解することができる。虚構的对象の不完全性とは、ホームズの血液型が何型であったかを決定する証拠がどこにもないというような事実を指す。決定性という概念は次の如く定義される。

- K は決定的である \iff いかなる性質 P についても、 P を持つことか、 P を持たないことのどちらかが K の内に本質的である。

明らかに虚構的对象は決定的でない。ウォルターストーフによれば、この非決定性こそが、ふつうに素朴理論が虚構的对象の不完全性と呼び習わしている内容なのである。

三浦によれば、マイノング主義と理論的実体説・種類説とはあまりに正反対なので、実は食い違いについては決意問題に帰着するかもしれない。理論的実体説が批評家定位の理論であったのに対して、種類説は作者定位の理論であると言える。

他にも種類説には興味深い点がある。第一に、記述理論と相性がよいこと。第二に、アリストテレス詩学の現代的形態と見ることができることである（もっとも、アリストテレス詩学の成否と種類説の成否とは厳密には別問題である）。

7. 寓意説（プランティンガ*）

寓意説は *de re* 理論の一種である。寓意説によれば、虚構作品は非実在の対象についての記述ではなく、すべて実在の対象についての特殊な記述である。『動物農場』のような風刺小説を考えてみれば、登場するキャラクターは動物ばかりだが、実は現実のスターリンについての記述であることはすぐ分かる。寓意説では、風刺小説に限らずいかなる小説も実は現実世界についての記述なのだと考える。しかし、寓意説にはいくつも難点を指摘できる。

8. 代入的量化説（ウッズ）

ウッズによれば、対象的解釈ではなく代入的解釈を採用すれば虚構の問題は解決する。虚構演算子の内側にはたらく推論規則を制限することで、矛盾の問題は回避しうる。たとえば $O((\phi \wedge \neg \phi) \rightarrow \psi)$ はトートロジーではない。消極的かつ純粋な言語説と言えよう。

9. 状況説（ハインツ）

状況説とは、小説において描写されている虚構世界とは可能な状況である、という立場である。ハインツは虚構世界については状況説を取るが、虚構的对象については言語説を取っている（と思われる）。

ハインツは、自由論理における超付値を利用し、矛盾と二値性の問題を回避しうる虚構論理の体系を構築しようとしている。この虚構論理においては、「作品世界において、 $Fa \vee \neg Fa$ 」はつねに真であるが、「作品世界において Fa であるか、または作品世界において $\neg Fa$ 」は偽である。

*——ここで状況という言葉は、可能世界と対立させて用いられている（42頁）。虚構世界が一個の可能世界なのであれば、ホームズの血液型や髪の毛の本数は（われわれは知ることができないにもかかわらず）すべて定まっている。これに対して虚構世界が状況なのであれば、ホームズの血液型は定まっていない。

*——超付値とは、ファン・フレーセンの導入した概念。どんな解釈でも真のとき、そのときのみ超付値で真であり、それ以外のとき、超付値では真でも偽でもない。

10. de re 可能多世界説（クリプキ）

虚構的対象は、多数の世界に跨って存在する対象である。様相命題論理の可能世界意味論では、 $\langle W, R, V \rangle$ というクリプキ・モデルが用いられた。これに対し、様相述語論理の可能世界意味論では、 $\langle W, R, V, \Psi \rangle$ という四つ組が用いられる。可能世界 a に対し、 $\Psi(a)$ は a における個体の集合を表す。可能世界ごとに、存在する対象の個数は異なりうることになる。

クリプキによれば、同一のものが複数の時間点に跨って持続するように、虚構的対象は複数の世界に同一性を保って存在しうる。だがそうだとすると、ホームズをホームズたらしめる手がかりなしに貫世界同一の対象ホームズを選び出さねばならないことになるが、それは不可能ではないのか。こうしてクリプキは以前の立場を撤回し、物理主義の道に進むこととなった。

*——なぜホームズを同定し得ないことが問題なのか、よく分からなくなってきた。当初はこう考えていた。ある可能世界において、ホームズとまったく同じ偉業を成し遂げた人物が存在することには誰もが同意するであろう。しかし、その人物がホームズかどうかは分からないのである。「ホームズは、ドイルの小説で書かれたような偉業はすべて成し遂げていなかったということもありうる」という文は真だろうからである（実際、ワトソンが嘘を書き続けていたのかもしれない）。このように、何を指示しているのか分からない固有名というものは受け入れがたい、と。しかしこれは実在の対象についても同じことではないのか。実在の対象であれば無問題とする根拠がよく分からない。241頁に根拠らしきものは書いてある（実在の対象であれば因果連鎖が確保できるから大丈夫という感じなのであろう）が、よく理解できない。

11. 物理主義（クリプキ、カプラン、ドネラン）

物理主義とは、指示の理論における立場の一つである。ラッセルの記述理論では、固有名は記述の束へと分解されてしまったが、物理主義においては固有名はただ一つの対象を直接に指示できるとする。

非存在物は諸可能世界に無数に存在しているが、特定の非存在物を固有名をもって指示することはできない。クリプキの貫世界同定は記述と無関係になされるがゆえに、因果的に指示できない対象は指示できないことになる。それゆえ虚構的対象も指示することはできない。

ホームズとまったく同じ性質を持つ人物 α が実在したことが判明した場合、記述理論と物理主義とは対応のしかたが異なる。

- ・ラッセル……ドイルの小説は α を指示する。
- ・物理主義……ドイルの小説は α を指示しない（因果連鎖が存在しないため）。

よって、素直に考えれば、物理主義では虚構言説は無意味であることになる。

12. de dicto 可能多世界説（ルイス）

ルイスによれば、虚構名「ホームズ」は何も指示しない（ここは記述説や物理主義と同様）。しかし、「ホームズ」は不確定な名ではある。虚構名は、各世界に応じてそれぞれのものを指す。ホーム

ズが誰であるかは未規定箇所なのである（ただし、『戦争と平和』のナポレオンなど、未規定でない虚構的对象も存在する）。

「マクベス夫人は二人の子を生んだ」「ホームズはダーウィンだ」という文を考えると、ルイスとクリプキの立場の違いが明確になる。

- ・クリプキ……どちらも偽。
- ・ルイス……ある最小離脱世界では真であり、別の世界では偽である。よって定義上、虚構Sにおいては真でも偽でもない。

「ホームズ」という名は現実世界では何も指示しない。しかし「ホームズ」という名はホームズの人物の集合を意味する。

de dicto 説なので、虚構言説に対しては虚構演算子を付して考える。「inS (ホームズは賢い)」など。

13. de dicto 超世界説（スタルネイカー、カリー）

カリーの説では、虚構言説は三つに分類され、それぞれ以下のような論理形式を持つ。

- ・小説内の文……虚構名は束縛変項と解する。
- ・小説について語る文……虚構演算子つきと見做す。例：inS (ホームズは探偵だ)。
- ・貫虚構用法……虚構名は世界から確定記述への部分関数と解する。

カリーは、貫虚構用法に限っては、理論的実体説に近い。カリー本人も、自身の説は理論的実体説を明確化したものだとしている。

しかし、虚構名の意味がその言説の種類によってころころ変わるのはいかにも不自然であろう。

14. メイクビリーブ説（ウォルトン）

メイクビリーブ説とは、虚構言説はすべて一種のごっこ遊びと考える立場である。これにより鑑賞行為を適切に説明できるとともに、貫虚構用法にも耐えうる理論となった。

欠点は、メイクビリーブの無限上昇を前提しないと貫虚構用法が扱えない点である。新たな非公式メイクビリーブが生成されるたびに、虚構的对象の同一性言明の意味が変わることになる。たとえばある批評家が、ある雑誌で「ホームズは生涯結婚しなかった」と書き、後日、別の雑誌で「ホームズは工藤新一より賢い」と書いたとき、この批評家は同じホームズについては語っていないことになる。これは不自然である。

15. de re 心眼説（ハウエル）

クリプキによれば、指示ということが出来るためには、因果連鎖によって指示するか、もしくは性質によって一義的に対象を定めるということが必要であった。ところが、ハウエルによれば、それ以外の方法によっても指示が可能である。

ハウエルの「注意の場 (field of attention)」理論によれば、キャラクターの創造とは、想像力のなせる技である。ハウエルは、「ドイルの心眼 (mind's eye) の前に抱いたこの男」としてホームズを一意的に特定できるとする。ホームズは「注意の場」の焦点を占める。それによってホームズを特定することが可能となる。

三浦によれば、ハウエルの理論は、いわば核性質によってでなく核外性質によって対象を同定しようとする理論である。しかし、これが本当に可能であるのかは疑問である。また、もしこのような同定が可能であったとすれば、可能世界そのものを同定してしまったほうがすっきりするのではなかろうか。

16. 限界仮説と唯一仮説（スタルネイカー）

スタルネイカーは、最小離脱世界は存在し、しかもただ一つ存在するという一世界説を採用している。一世界説とは、虚構世界はただ一つの可能世界に対応しているという立場である。一世界説では、虚構言説を *de re* 様相として解釈しても *de dicto* 様相と解釈しても意味として同じになる。貫世界同定を行わずに *de re* 様相を考えうるので、大変都合がよい。

スタルネイカーは、限界仮説と唯一仮説とを認めることで、一世界説に根拠を与えている。

限界仮説 いかなる世界と前提についても、少なくとも一つの最小離脱世界があるとする仮説。

唯一仮説 いかなる世界と前提についても、ただか一つの最小離脱世界があるとする仮説。

限界仮説に対するルイスの反論はこうである。「東京タワーが 334 m より高かったとしたら……」という反実仮想において、東京タワーが 334.1 m であるような世界を考えてもそれは最小離脱世界とは言えない。その世界は、現実世界との類似度において、東京タワーが 334.01 m であるような世界に負けるからである。334.001 m の世界、334.0001 m の世界、というふうに考えていけば、同様の論法が成り立つので、最小離脱世界は存在しない。言い換えれば、どんな世界 w に対しても、 w よりも現実世界に類似した世界 w' が存在する。

この反論に対するスタルネイカーの再反論はこうである。ルイスによる反実仮想文の定義によれば、「 x がいかなる実数であれ、もし東京タワーが 334 m より高かったとしたら東京タワーは x m ではなかっただろう。 $\forall x(\phi \rightarrow \neg\psi x)$ 」という文が真であることになる。しかしこの文は「もし東京タワーが 334 m より高かったとしたら東京タワーは x m だったかもしれない、という実数 x はない。 $\neg\exists x(\phi \rightarrow \psi x)$ 」を含意する。これは不合理である。

* ——ルイスの定義では「 $\phi \rightarrow \psi := \neg(\phi \rightarrow \neg\psi)$ 」「 $\phi \rightarrow \psi := \neg(\phi \rightarrow \neg\psi)$ 」である。

唯一仮説に対する批判としては、クワインが反実仮想文の分析そのものへの批判のために出した次の反例を挙げることができる。

- ・もしもビゼーとヴェルディとが同国人だったとしたら、ビゼーはイタリア人だったであろう。
- ・もしもビゼーとヴェルディとが同国人だったとしたら、ヴェルディはフランス人だったであろう。

ビゼーとヴェルディとが同国人である世界のうち、両者が日本人である世界よりも、イタリア人だったりフランス人だったりする世界のほうが現実世界に類似していることは確かである。しかしどちらがより現実世界に類似しているかは決定不能ではないのか。したがって最小離脱世界が唯一に定まるとするのは誤りである。

この批判に対するスタルネイカーの再反論は、このような非決定性は語用論的要因であるから無問題だとするものである。二つの命題はそれぞれ真でも偽でもない。しかし二つの命題を選言で結んだものは、真だと言えるとスタルネイカーは考える（論理的には超付値を用いる）。こうして、真偽の定まる命題については最小離脱世界が唯一に定まることになり、唯一仮説が守られる。